

# 福島浜通り研修を通して

大熊D班

浅野翔真

増田李乃

仲村まどか

# 研修を通して

- ・ 「安心」という感覚は人それぞれ異なる
  - ・ 考えを一度にすべて変えることは難しい
- 視点や考え方のヒントから、少しずつ前向きな変化が生まれるのではないか！？

# 想像と現実のギャップ

## 【参加前】

- 事故前の浜通りの姿をほとんど知らなかった。
- すでに人が住み始めている地域がある？
- 帰還困難区域の様子を具体的にイメージできない。

## 【参加して．．】

- 実際に放射線を測定してみると．．．
  - 街中探索をしてみると．．．
- イメージと現実にはギャップがある!?

## 例えば . . . .

- 福島第一原発や中間貯蔵施設では、防護服ではなく通常の作業服で働く人も多かった。
- 管理区域でも線量が基準値以下の場所がある。
- 避難指示が解除された地域では線量がそれほど高くない。

# 気づきと課題

- 知る機会を持つことが大切
- その機会を他の人にも提供すること
- ◎“安全”と“安心”は別の概念
- 👉 双方を考える視点が必要

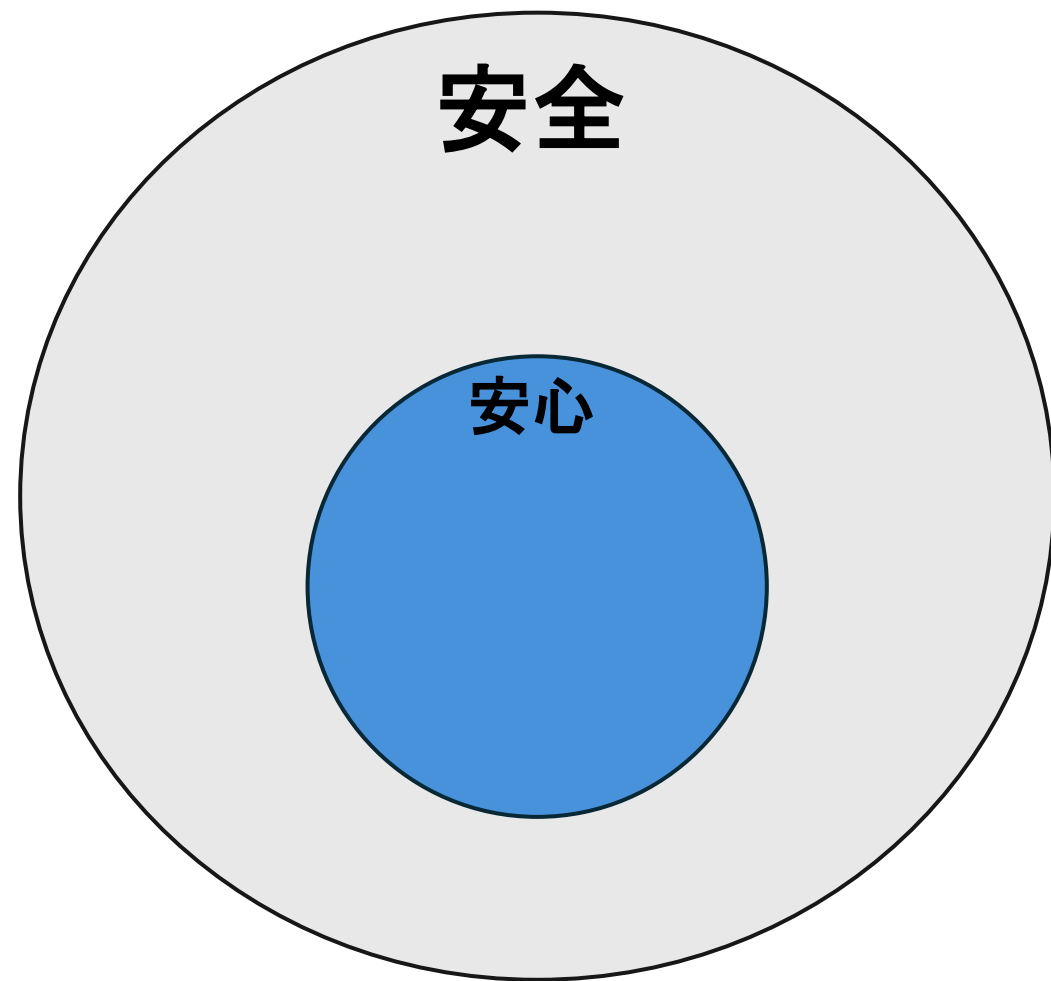
# 安全であるための基準

- 帰還困難区域の線量の条件
- 農林水産物のモニタリング検査      など

これらは具体的な数値で表される  
→確実に信頼できる？

# 安心できるか、ということ

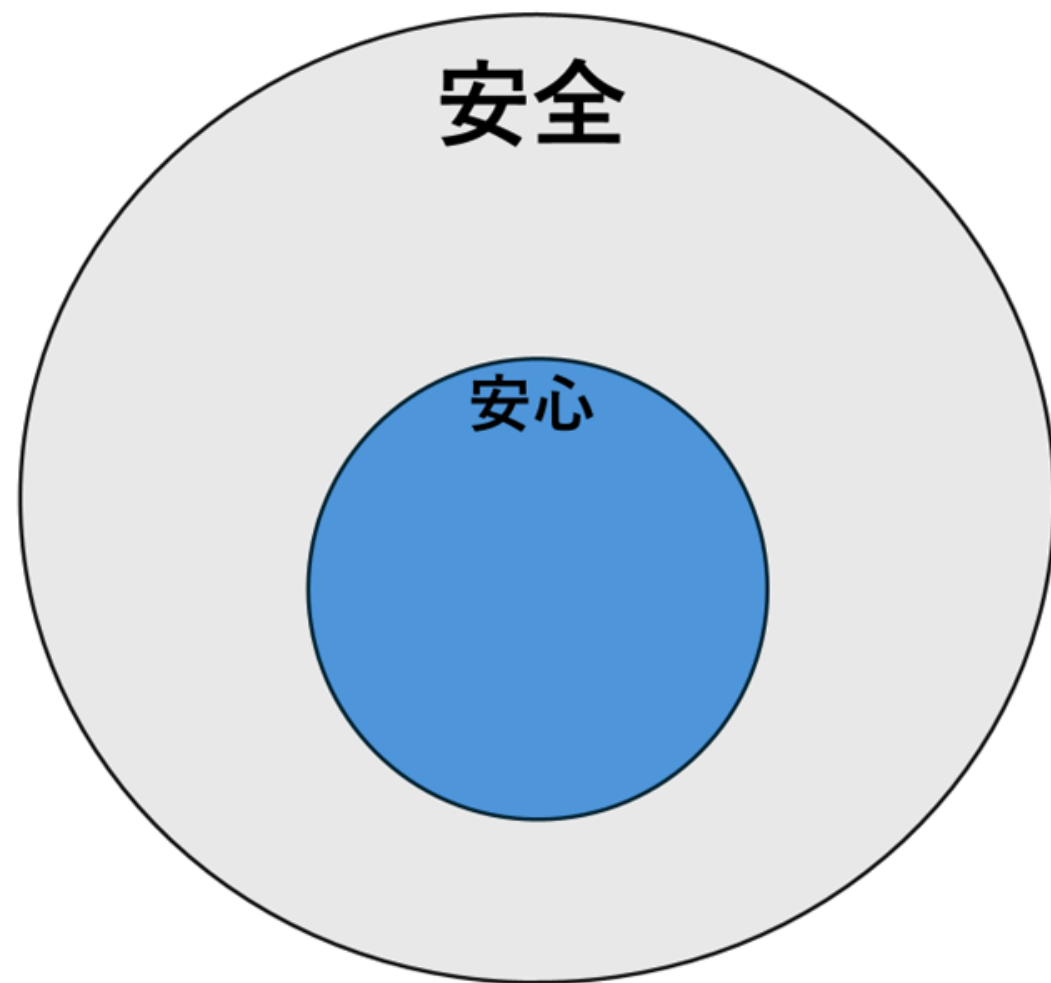
- 安全＝安心 ではない
- 情報を信頼し、大丈夫だと  
安心することができるかどうか  
が重要



# 安心できるか、ということ

- 安全 = 安心 ではない
- 情報を信頼し、大丈夫だと安心することができるかどうか  
が重要

試料の測定で実感



# どのように伝えていくか

福島原発へのイメージ

研修前

- ・ 人は立ち入れない
- ・ 入るとしても防護服など

研修後

- ・ 身体への影響はとても小さい
- ・ 安全

# 被害を受けた地区の将来

線量が基準以下 →前提

日常生活（インフラ、職、生活、人などの環境）

非常時

未来（廃炉、除染活動終了後）

ここまでの話

第三者が放射線の安全の基準を知らない

→安全 ≠ 安心だから

そ 街の復興は？産業は？

廃炉・除染が終わったら？

どんな街にしたい？

**震災・福島自体について  
知る機会が少ない**

やってPRを？  
(みたことある？)

何してたのか知ってる？

地元の人はどうな思いで過ごしてた？

何を願うのか？

**研修前は福島に対し  
どのようなイメージを抱いていましたか？**

# 私の場合

## 研修前

正直爪痕がかなり深く、まだ回復しきれていないイメージ

## 研修中・その後

爪痕はまだ残っているが、  
確実に、着実に復興が進んでいて、新たな一歩を歩んでいる

# 班の議論でも

## 研修中盤

生活の様子があまり見えない

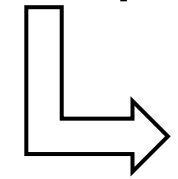
→(街に対し)暮らしにくいのでは

ネガティブな視点

## 研修終盤

そこに生活の空間が見えた

→ポジティブな視点も



生活を知ってもらう難しさも実感

「福島について知ってもらおう」

→ “安心”にも関わってくる

# 「知ること」と“安心”

- よりリアルに物事を考えられるように  
→他人事ではなく自分にも関わることとして
- 自身の価値観に沿った考え・意見が構築される  
→偏見(先入観)・レッテルに流されない意見を持つ

**自分自身で考えて、情報を信頼し、安心できるように**

福島印象はどのように変わりましたか？

# みんな違うということ

安心の感覚も、印象も、考えも、人それぞれ異なる



意見・価値観の共有

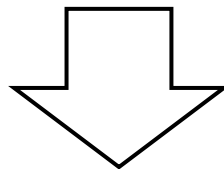
他の人の考えと自分の印象から新たな視点、ヒントを得られる

# まとめ

「福島を知ること、知ってもらふこと」



新たな視点やヒントを得られる



“安心”の形成につながるかも

# 最後：伝えること

「福島を知る機会」を提供することも大切

ある意見を主張するだけでなく、多角的な考えも伝えていきたい

この研修の後、  
あなたは周りの人にどのような影響を与えていきたいか？